

「近代看護の母 - ナイチンゲール -」

現在、新型コロナウイルスの医療現場はまさに戦場で、大変な苦勞をされていることと思います。

私も含め外野から見ると、どうしても医師達に焦点を当てがちですが、実は実際に現場で働いているのは看護師さん達です。彼女たちが、命を賭して働いてくれるおかげで医療が回っているのです。私は以前から、彼女等がどうしてあのように献身的になれるのか不思議に思っていました。

私は、20年以上看護学校の講師をしています。

また、私の診療所は看護学生の研修機関となっていて、彼女等との付き合いは非常に長いのです。

私の知っている看護学生は、普通の若者で、時に、はしゃいだりして、叱られることもあります。ところが、看護師になると一変し小さなナイチンゲールとなるのです。不思議です。

近代看護の母といわれる、フローレンス・ナイチンゲールは「自分の生涯の使命は、人類を救うこと」「人類のために苦しむのは、ひとつの特権です」と語る彼女、実は波乱万丈の人生を劇のように駆け抜けたのでした。

1820年5月12日、イギリスの大富豪の家に次女として生まれました。

家族や親族の愛情を一身に受け育ったのですが、「何かが違う・・・」と感じ、虚栄や快樂に満ちた世界に疲れ果て、自己嫌悪に陥っていました。

そして、家族の大反対を押し切って看護師の道に進んでいったのです。

今と違い、看護職の社会的地位は確立されていない時代でした。

1853年、クリミア戦争が勃発すると、ロンドンの病院で看護監督をしていたナイチンゲールは38人の看護団を組織して戦線へ向かったのです。

軍事病院の環境は劣悪で、さらに看護蔑視の軍医や将校から冷遇、いやがらせを受けましたが、彼女は屈せず目の届かないところまで気を配り、進んで仕事を見つけては黙々と働き続けたのでした。その姿に医師達も心を動かされ、彼女を頼るようになっていきました。

敵味方の区別なく、負傷兵達に献身する日々は2年間にも及びました。

56年、パリで講和条約が結ばれ、クリミア戦争は終結しました。「今なすこと」に全精魂を注いできた彼女は、最後の患者が病院を去るまで任務を全うしてイギリスに戻ったのです。

帰国後は、「本当の戦いはこれからだ」と、激務の疲れも癒えぬうちに新たな行動を開始しました。そして人類の未来を開く「看護革命」に着手するのです。

先ほどの、看護学生の話に戻ります。彼女達は、2年生の時に戴帽式を行ないます。

ナースキャップを先生に被せてもらうのです。

私も参加したことがあります。それはそれは、おごそかな式典です。

そこで、彼女達はナイチンゲールの誓いを合唱します。

そして、寝る暇もないほどの厳しい実習をへて看護師となっていくのです。

その時にはもう、私が教えていたかつての若者ではなく、小さなナイチンゲールとなっているのです。

